

2012年に始まった APMoA Project, ARCH。

今回で10回目となりました。

今回ご紹介しているのは、愛知県で制作を続ける丹羽康博さんの作品です。

タイトルは「詩としての行為」。

2007年に制作された作品から新作にいたるまでを通して、丹羽さんという作家を知っていただくというものです。

まず、コレクション展の展示室を通過して展示室6に近づくと、左手の壁にこんな作品が。



なぜカンヴァスが裏返しになっているのでしょうか？

作品のタイトルにヒントが隠されています。ぜひ会場で考えてみてください。

展示室の中には、さまざまな作品が点在しています。



こちらは、愛知県立芸術大学大学院の修了制作として発表されたシリーズ〈詩としての彫刻〉（2007-2009年）です。



このシリーズでは、自然の中から採取したものが、ほとんど手を加えられることなく作品として提示されています。

例えば、この《I caught a falling-leaf.》（2008年）。



紙の箱に納められた葉は、一見落ち葉のようですが、「落ち葉」ではありません。

「落ち葉」は英語で“fallen leaf”と言いますが、この作品のタイトルでは“falling-leaf”となっています。訳すなら「落ちていく途中の葉」となるでしょうか。

丹羽さんが、木から落ちる葉を一生懸命掴もうとしている姿が思い浮かびませんか？

このシリーズの作品を観るということは、自然が作り出したものを見つめることであると同時に、自然の中からそれらを取り出した作家の行為そのものに思いをはせる、ということにもつながっていきます。

他の作品も見てください。

一部が焼け焦げたソファの前に、何やら立方体が…



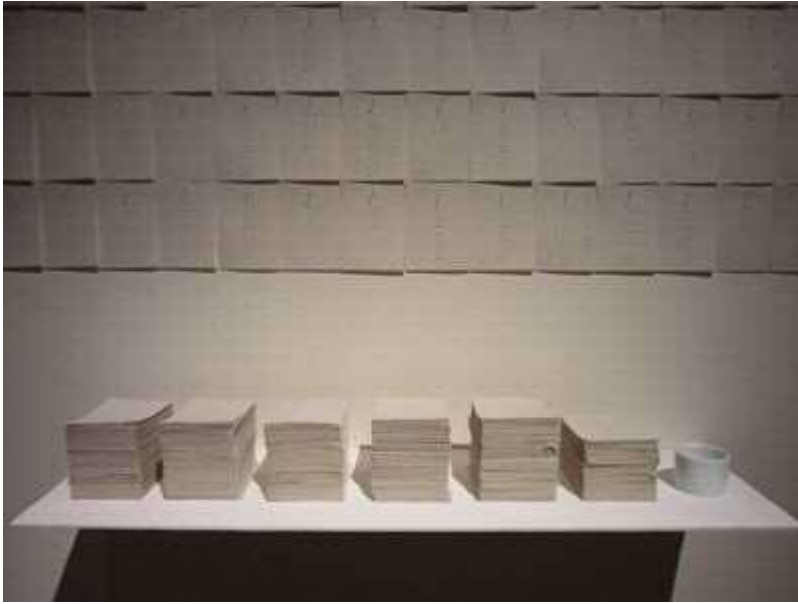
この立方体の正体は、この展示室にもともとあったものです。

丹羽さんの手にかかると、彫刻作品のように大変身しました。

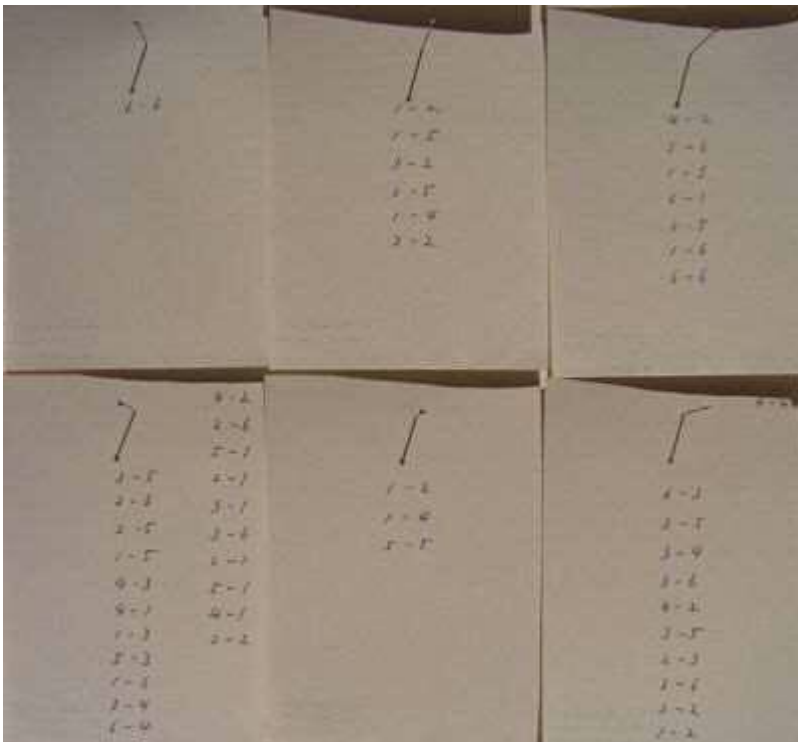
しかし、なぜこのような積み方をしているのでしょうか？

よく観察すると、作品と空間との関係が見えてくるかもしれません。

さて、その向こう側の壁にあるのは今回初めて発表される作品です。



壁に留めてある紙の一枚一枚には、数字が描かれています。



これらの数字は何を意味しているのでしょうか？

一緒に展示されたものをよく観察していただくと、作品がどのようにしてできているのか分かっていただけられるかもしれません。

丹羽さんがどうしてこのような作品を作ったのか、ぜひ考えてみてください。

さて、今回も、展示室の外に展示された作品があります。



えっ？作品が見えない？

確かにこの距離ではよく見えませんが、この通路の奥にも作品があります。

ぜひ会場で見たい作品の一つです。

さて、ロビーに出ると、瓶がたくさん並んでいます。

これも丹羽さんの作品、《Three minutes breathing》（2011年-）です。



タイトルは「3分間の呼吸」という意味で、瓶の中で3分間呼吸をして封をしたものを集めた作品です。一つ一つの瓶のふたに記された日付を見ていくと、やがて並べ方の規則性が見えてきます。



この規則性が、作品の重要なポイント。作品の周りをぐるぐる回って見つけてみてください。  
呼吸とは日々生きることそのものですが、皆さんが生活する中で感じていることを、この作品に感じ取ることができるかもしれません。

何だか「考えてみてください」が多いブログになってしまいましたが、実際に、この展覧会では、一見何の変哲もないように見える作品が少なくありません。

しかし、ちょっと眺めただけで通り過ぎてしまっってはもったいない！

なぜこの作家はこんなことをするのだろう？この作品は何を意味しているのだろう？と考えてみると、皆さんの中にも共感できるものが見つかるかもしれません。

そして、そこで考えたり感じたりしたことが、作品の前を立ち去った後も皆さんの中に思考として残っていくことで、作品は生き続けると言えるのではないのでしょうか。

一度読み終わった詩を反芻しているといろいろな解釈が生まれる、この展覧会では、そんな体験を楽しんでいただければと思います。

APMoA Project, ARCH vol. 10 丹羽康博「詩としての行為」は7月21日（月・祝）までの開催です。

ぜひご来場ください！

(S. N.)